Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-07-04

家族農業の放棄と農村的慣行の行方 : タイの事例から（特集 現代アジアから日本をみる）

高井, 康弘

(Citation)
社会学雑誌,18:29-41

(Issue Date)
2001-03-31

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81010962

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81010962

家族農業の放棄と農村的慣行の行方

――タイの事例から――

高井康弘
大谷大学文学部助教授

はじめに

北タイ・チェンマイ盆地の一農村に長期滞在したのは、一九八〇年代中頃のことである。[1] 以来、二年に一度程度の短期訪問という限られた経験を重ねて、十数年がたってしまった。そこでの見聞を反芻してみると、陳腐な感想であるが、当地の人びとのあり方に大きく変化した部分と根強く変化しない部分の両方が、やはりあるように思う。

本稿では、急速に暮らしを包摂してゆく資本主義的市場経済にたいする地域社会の人びとの対応の一事例を、チェンマイの一農村の人びとにみるのだが、まずは大きく変化したと思われる経済生活の側面に注目する。経済生活の変化を、家族農業を基本とする小農民的経済生活スタイルの維持から放棄への転換と捉え、その過程における人びとの諸選択の背景と意図について考える。つぎに、根強く変化しない農村的社会文化慣行の側面を取り上げる。そして、現代タイ農村の人びとにおいて、経済生活の転換と社会文化慣行の維持が、どう相互連関しているのか考える。

一　急変する経済生活

農村開発と市場経済の浸透

まずは、現代タイ農村の人びとの経済生活の転換の一例を、チェンマイ盆地中央部を貫流するピン川流域の低湿地に位置する一農村にみ、そのありようを年代別に確認しておく。[2] 当地の人びとの経済生活はかなりの変化の連続であるが、その変化は開発行政の後押しを受け、資本主義的市場経済が農村部を包摂していく過程といえる。

人びとの話すところによると、一九六〇年代以前の当地は寒村であった。雨季末の洪水に頻繁に見舞われるため、雨季稲作の収穫が安定的に期待できない農地が多かった。

そこでピン川に築かれた農民堰からの給水による乾季稲作も試みられていたが、その給水は限られたものであり、収穫は芳しくなかった。（ピン川を遡上して来る）中国系米商人との接触が早くからみられた一方、飯米を確保できない年もしばしばあった。人びとは小魚を採り、近隣の村びとの米と物々交換することで糊口をしのいでいたという。

しかし一九七〇年代以降、農業事情が大きく変化する。稲作に関しては乾季作が安定する。ピン川の農民堰からの給水に加えて、政府潅漑（メー・テーン計画）用水路からの給水を得て、乾季の水供給事情が向上したこと、および、結実が日照時間に影響されない高収量米が導入されたことが、その要因である。稲作は飯米用のモチゴメ作第一だが、市場用のウルチも併作される。さらに乾季のニンニク作も、消費市場の拡大で売価が良くなったため、多くの農家が行なうようになる。また、果樹ラムヤイ（龍眼）が屋敷地内や集落周辺の微高地に植えられ始める。ラムヤイは洪水被害に弱いが、その果実の売価は良く、年一回の収穫で村びとに臨時収入をもたらす果樹である。換金作物作や農業労働の就労機会の増加で、現金収入は増加し始める。この時期、自給農業の安定化と市場農業の試行が同時に進行する。

また、七〇年代中頃以降、当地では耕運機が水牛に代わって水田耕起の主役となる。役畜用の水牛が減少したため、水牛の糞が入手困難になり、肥料に関しても化学肥料の比重が急増する。ガソリン代、肥料購入費等農業経費が膨張し始める。

続く一九八〇年代は、消費生活が急速にお金のかかるものに変化し始めた時期である。七〇年代の道路整備と八〇年前後の電化が消費生活の変化を準備し、八〇年代以降、バイクやテレビがまず普及し始める。

生活様式は節約自給型から商品購入型に変化し始め、消費支出は増加し、人びとは現金獲得に駆られるようになる。現金収入の多寡が、作種選択など農業経営方針の選択の主な判断基準となり、農外職種選択の判断基準にもなっていく。現金収入獲得の主な方途には、市場農業への傾斜・在村農外就労・通勤就労・出稼ぎなどが考えられる。しかし、当時、最寄りの地方都市のラムプーンやチェンマイの農外雇用労働市場はさほど拡大していなかったので、通勤就労先は容易に見当たらない。遠方への出稼ぎは苦痛であり最後の選択である。人びとは現金収入獲得の手段として、まず市場農業に期待することになる。

折りしても八〇年代、政府によるピン川上流のダム整備により、雨季の洪水が軽減され、乾季の給水も安定するなど当地の水利環境の改善はさらに進み、市場農業の拡大は一見順調に進む。八〇年代中頃には当地は農業村の様相を呈してくる。低地では稲作二期作、微高地では雨季稲作・乾季ニンニク作の二毛作がさかんに行なわれる。農業の通

年化は、地域内農業労働の機会を副次的に欠くことなくもたらすことになる。前述の四つの選択肢のうち前二者の組み合わせで、人びとは現金収入増を図っていく。

過渡期における家族農業の維持

ただし、八〇年代中頃までは、村びとの市場経済にたいする態度は次の折衷的なものであった。すなわち、一方で彼らは、家電製品に囲まれた便利な都市的生活様式を志向し、市場農業の展開を図るなど、市場経済をすでに基本的に受容し始めていた。しかし他方で彼らは、旧来の自給自足型の家族農業のスタイルを部分的に維持してもいた。

まず、主食であるモチゴメについては、自給の重要性を強調する人びとが多く、実際、稲作農家の多くが自給用のモチゴメと市場用のウルチを併作していた

また、家事労働、農業労働のたいていは、家族労働力を駆使して行なわれていた。当時、親が四〇―五〇歳代以上の世帯は、多数の子供がいるのが普通であり、子供たち、とくに娘たちは未婚の間は恒常的に家事労働、農業労働を分担して手伝い、結婚後も同居子夫婦が労働の中核となり、親の屋敷地に共住している他の子供世帯も、さまざまに労働力を融通しあい、親世帯を手伝うのが通常であった［高井、一九八八］。また、農家間の家族労働力の等量交換慣行である結いは、田植え・稲刈りなどの農作業では、重要な労働力調達手段になっていた。換金作物作を中心に日雇いや請負の形で村内や近隣村の人びとが賃金労働の雇用者や被雇用者になりあう関係もかなりみられたが、当時はまだ、家族および結いの労働力が、農業の基本労働力であり、その利用が何らかの事情で困難な時に雇用労働を活用する印象があった。

自給型家族農業の維持は、次の一見矛盾する二つの態度を背景に持つものであった。すなわち、ひとつは、節約型小農民に典型的な安定志向、気まぐれな市場経済に対する警戒感ゆえの家族農業への固執である。実際、調査村にて筆者自身、こうした旨の言葉を幾度か耳にした。

そして、もうひとつは、市場経済を基本的に受容したなかでの、収支改善の一方策としての家族農業再活用の態度である。八〇年代中頃当時、農業の生産量は増大し、（旧来の生活様式での）自給水準は充分確保できるようにはなったものの、生活様式の変化に伴う現金支出増を補うには、地方の雇用労働市場の展開は不充分であり、稲作は米価の低迷と諸経費の高騰で赤字気味であった。ニンニクなどの換金作物も農業条件に制約され、通年での作付は困難である。赤字の稲作の継続は、他に有望な選択肢が無い状況下での苦渋の選択であった。こうした状況下、彼らは自給型家族農業を部分的に採用することで、収支の改善を図ろうとしていた。

たとえば、当時の人びとは、ウルチを売却して、モチゴメを購入するばあいと、モチゴメを自給するばあいで、どちらが出費がより抑えられるかを計算し、後者を選択していたし、家族労働力の駆使に関しても、肥大する農業経費の抑制がその目的であった。彼らは農産物価格が低迷する状況下、市場農業の現金収入の伸び悩みの問題に直面していたが、現金支出の急増に対処するためには、自給型家族農業を部分的に採用し、諸経費の切り詰めを図らざるをえなかったのである。

小農民的経済生活の放棄と投機商人的スタイルへの傾斜

一九八〇年代中頃のこのような折衷的態度は、しかし、以降の経済生活の変化のなかで放棄されていく。八〇年代後半から九〇年代前半にかけてのタイ経済の急成長期、人びとの現金支出はさらに増大する。稲作については銘柄米の契約栽培などが模索されるが、米価の低迷で成果が得られない。しかし、換金作物作や農外就労で一定の蓄財をした人びとは、自動車を購入し、コメやラムヤイ（龍眼）などの農産物仲買に比重を移してゆき、さらに所得を得る。その結果、従来の高床家屋に代わり、都会風の家屋が目立つようになり、また、各種家電製品も加速度的に普及する。

そして、九〇年代中頃以降、洪水のリスクが消えないなかで、村びとはついに稲作に見切りをつけ、水田をラムヤイ果樹園化し始める。[3] ラムヤイは中国市場への輸出も好調で、政府も将来有望と栽培を推進している果樹であり、高い売価が期待できる。さらに、手間がかからず、空いた時間を農外就労に振り向けうるメリットもある。こうして当地の村びとは、自給用の稲作から、市場用の稲作・ニンニク作に移行し、さらにラムヤイ果樹単作に移行した。一言でいえば、それは低収入安定型から高リスク高収入型農業への移行である。ラムヤイは高い売値が付くが、天候により作況に極端な差があり、また、価格の変動幅が大きい果樹でもある。農外就労に関しても、高リスク高収入型の商売であるラムヤイの先物買いに多くの村びとが手を染める。

高リスク高収入のラムヤイ作や農産物仲買への傾斜が危うい選択であることは、彼ら自身も承知している。たとえば、筆者の居候先のC氏のばあい、ラムヤイの先物買いで当ててピックアップ・トラックを購入、所持していたが、先年同じくラムヤイ先物買いで大赤字を出し、売却してしまうなど、その収支状況はきわめて不安定である。将来の不確かさゆえ、どうかなった時には一人息子を頼むと真顔で彼は言う。それでも稲作の見返りの薄い重労働から解放された現状には、人びとは異口同音に肯定的である。

彼らは自らの不確かな将来への不安は語るが、職業への不満はほとんど語らない。彼らは都会風の住居を建て、家電製品や自動車を揃え、我が子には学歴を積ませ、農民の

ジリ貧の境遇から脱出させたいと願っている。こうした目的を果たすためには、より高い現金収入が必要である。そうである以上、そして、現状ではジリ貧の稲作かリスキーな職業かの選択しかない以上、後者を選択せざるを得ず、その選択をしたのだと彼らは言う。十五年前は小農民的な安定志向と市場不信を語った人びとが、現在では投機商人的に市場に正面から向き合う覚悟を語る。

以上、チェンマイの一農村の経済生活の変化を概述した。村びとは基本的に市場経済を受容する形で自らの経済生活を転換させてきた。ある時期まで彼らは節約型の家族農業を部分利用してもいた。しかしその後、家族農業は放棄され、村びとの市場経済にたいする態度は投機商人的なものに変化していった。

では、こうした市場経済の受容は、どのような村びとの社会関係、世界観のもとで行なわれてきたのであろうか。また、経済生活の変化は、彼らの社会関係、世界観にどのような影響をもたらすのであろうか。以下は、これらの考察に焦点を移す。

二　経済生活の変化と農村的社会関係の持続

小農民と生活様式の変更

経済生活の変化と村びとの社会関係、世界観との関係について考える際、まず、気になるのは、彼らの社会関係や世界観における経済生活の位置付けである。

七〇年代以降、村びとは農業機械や高収量米の導入など農業面の変化を抵抗無く受け入れ、家電製品などの購入にも積極的であった。彼らは節約型の小農民的経済生活スタイル、つまり家族農業を基本に置き、市場経済との接触は部分的にとどめるスタイルの放棄にはさほど躊躇が無かった。前述のように、家族農業の部分採用は八〇年代後半まで残り、最終的なその放棄には時間がかかった。しかし、その躊躇は、状況を予測しかね、収支の損得を計りかねるがゆえの躊躇にみえた。深い心的文化的葛藤はそこにはあまりみることができなかった。結局は、旧来の経済生活スタイルへの執着の無さが印象に残った。そこで、そもそも小農民的経済生活スタイルが、彼らの社会関係や世界観とどのような関わりにあるものであったかということが気になるのである。

この点を考察する際に、まず念頭に浮かぶのは、レッドフィールドやウルフ等が強調する、いわゆる未開社会と小農民社会の概念上のコントラストである［Redfield 1956, Wolf 1966］。彼らによれば、ラドクリフ-ブラウン等以来の人類学は未開社会を主なフィールドとしてきた。未開社会とは、経済的、政治的関係と他の社会的関係の分化が進んでいない社会であり、共有された世界観のもと、社会関

係の諸領域が内的なまとまりをもち、全体性を保っている自律的小社会である。こうした社会のばあい、市場経済の受容は、たんなる経済的関係の変更にとどまらない。市場経済の受容は、従来の全体性や体系性の破壊を意味し、社会関係や世界観の変更を強いるものとなる。

これにたいして、小農民社会概念は、地域社会が外部の国家や市場経済や文明との関係の上に成り立っている部分社会であることを強調する概念である［Redfield 1956: 23—39］。小農民（peasants）は、一方で国家や市場経済といった大きなシステムに対応しつつ、他方で家族農業を維持することで自らの生を立てている耕作者をさす概念である[4]。そこでは、経済関係と他の社会関係の分化は、基本的に前提となっている。農家間や農家内の関係、たとえば、結い慣行や融通性のある貸借慣行や無償の手伝いなどは、一見両者の未分化を思わせる側面をもっている。しかし、小農民社会概念においては、こうした側面は市場経済との関係において構成され直したものと捉えられる。小農民のありようは内外の条件に応じて動態的に変化する。金銭出費を極力抑止する節約自給型の農家同士が緊密な互助関係を締結する閉鎖的地域社会を構成するばあいもあれば、個々の農家が自給性確保の上で余剰を積極的に市場経済に流通させ、開放的になるばあいもある。

旧来のタイ農村を、このような小農民社会の一変異とみなすとすれば、資本主義的市場経済の本格的浸透下での、彼らの節約型家族農業の放棄、そして脱小農民化も、外的条件に適応せんとする小農民的対応の延長線上の帰結といえなくもない。そして、このばあい、節約型家族農業あるいは小農民的経済生活の放棄は、即、小農民的経済生活と親和的であった彼らの世界観や社会関係の放棄を意味しない。彼らの世界観や社会慣行は、市場経済受容後の経済生活スタイルとも案外、親和的かもしれないからである。

維持される農村的社会関係

チェンマイの調査村では、農村内の社会関係や外部の諸制度や諸事象にたいする村びとの構えについては、基本的に変っていないと感じることが多い。

たとえば、農村内の社会関係については次のとおりである。すなわち、一方では、家族農業の放棄に伴い、生産面での共同・互助の比重は大幅に減少した。また、農外就労先の拡大や幼稚園や中等学校以上の就学率の上昇により、通勤者・通学者が増え、村はベットタウン化し始めた。

しかし他方、従来と同様、婚入婚出以外の社会移動はほとんど無く、屋敷地共住集団の延長線上に形成された血縁・姻縁が重層する村内関係であることに変わりない。村外での就労は、こうした血縁・姻縁の延長線上の親族ネットワークを辿ったものであることが多いし、農産物仲買の

合資団は、従来より密接な互助関係にあった村びと同士で組まれている。日雇い・出来高払いの農業労働者として遠方へ働きに出るばあいも、その情報は村びと同士のネットワークを通じて伝わり、村びと同士で集って出かける。村びとの活動範囲やネットワークは空間的に拡大するが、そのネットワークは従来同様、血縁・姻縁、あるいは故郷の地縁的絆によって編まれたものである。

そして、こうした旧来の農村ベースの絆の継続を反映して、地縁・血縁の共同を象徴的に表現する守護霊儀礼や農村仏教の儀礼慣行も基本的には大きな変更無く遵行されている。たとえば、出家式、結婚式、葬式といった通過儀礼は、相変わらず、親族・近隣の濃厚な互酬的関係が表現確認される機会である[5]。ホストたる当事者世帯は、親類・村びとを招き、宴を催すべきであり、招かれた側はお金や物を包んで参加し、ホストの顔を立て、宴を楽しみ、盛り上げるべきとされる。各世帯は多忙ななか、世帯員の誰かを必ず参加させるし、ホストも現金支出増で苦しいなか、ばあいによっては借金をしてまで、多額の費用を工面する。村の寺院施設の建立は、旧来の信徒組織の結束に訴えての布施集金を核にして行なわれる。農村ベースの親族・地縁ネットワーク内の人びとの間では、こうした互酬関係・共同関係が維持されており、その履行は依然、道徳視・規範視されている。

農村的ネットワークの内的関係の維持は、対内関係と対外関係の使い分けの維持ということでもある。ムルダーは、タイ農村の人びとの伝統的態度の特徴として、対内態度と対外態度を使い分ける二面性を挙げている。つまり、農村内関係に特徴的なのは内道徳の堅持であるが、外的諸力との関係は無道徳的で打算的な駆け引き・交渉関係であり、表面的には友好だが、実は敬遠の態度が特徴的であると述べる［Mulder 1979: 32］。

このような伝統的態度は、資本主義経済に包摂されつつある現代の村びとにおいても、さまざまな局面で依然根強くにみられる。たとえば、彼らが農産物先物取引でみせる、まるで宝くじを買うような投機的姿勢は、（秩序を前提にした予測期待が成り立たない）異界にたいする彼らの慣習的態度そのものであるように思われるし、負債に関して、内的態度と外的態度が大きく異なることは印象的である。一方で彼らは、農家間の労働力の貸し借りや、儀礼行事の際の互酬的関係には厳格である。しかし、他方、農業・農協銀行からの負債に関しては、まるで均衡感覚を欠くがごとくに、気軽に負債を積み重ねる[6]。政治権力については、かつてのように忌避すべき力ではなく、利益誘導のために利用すべき力と考えられるようになったが、ここにおいても内なる農村社会（身内社会）と外なる政治権力とのコントラストは明白である。

こうした二面的態度はかつての小農民的経済生活と親和的であった。外的諸力、たとえば自然の力（その象徴としての諸精霊）、市場経済、政治権力などは、小農民にとって内道徳の共有を期待しない相手であり、自らの内秩序を安定的に維持するためにも、表面的・部分的付き合いに止めるべき相手であった。彼らは家族や農村社会の内道徳を堅持することで、半自律的に経済生活を立ててきた。しかし、小農民的経済生活が放棄された後も、一方で、前述のように農村内的関係が拡散しつつも維持され、他方で、それと一対表裏をなす対外態度も維持されているようにみえる。

三　経済・道徳・宗教のタイ的連関

以上、資本主義的市場経済に巻き込まれつつあるタイ農村の人びとのありようを、急激に変化した部分と根強く変化しない部分の両面を対照させる形で述べてきた。以下は、この両面の連関について考えたいが、そのばあい、次の両極のアプローチがあると思う。

ひとつは、個々の文化的差異を超えて共通する目的合理性を、人びとの選択にみるアプローチである。彼らの現状を、その時々の内外の政治経済的、社会文化的諸条件を鑑みた、生存の確保のための目的合理的選択の積み重ねの結果とみるアプローチである。たとえば、小農民概念は、一定の政治経済的条件のもとで、地域住民が自らの社会関係・文化資源を利用・編成するとき、そこには、共通の類型がみられるはずであるという普遍主義的な観点（仮説）に基づく概念である。本稿第一章、第二章におけるタイ農村の人びとの小農民的経済生活の維持と放棄、および旧来の社会関係や態度の維持・採用についての考察も、基本的にはこの観点からの説明であったかと思われる。

この観点は、基本的には政治経済条件が収斂すれば、社会文化のありようも収斂していくことを予想するアプローチであり、地域的差異を過渡的諸段階に還元するアプローチとなる。たとえば、タイの人びとに根強い二面的態度の二面を、共同体内関係における道徳的態度と共同体間関係における無道徳的態度と考えれば、本来こうした二面的態度は市場経済の浸透の帰結としての共同体の解体とともに放棄されるはずのものかもしれない。しかし、経済・社会・文化それぞれの領域の変化速度は異なる。そこで、急変する社会では、そのズレが顕著となり、過渡的状態として、経済関係は変化したのに、社会文化は旧態依然にみえる段階がある。経済変化に相応する新しい文化がいまだ形成されていないばあい、人びとは従来の農村文化でそれに対応するしかない。人びとに生の意味を与える文化の形式が経済的社会的基盤の変化に追いついていない状況では、

彼らはいやおうなしに伝統的な文化の形式に拘束される［山下、一九八八：二六五］。経済生活の急変と社会文化慣行の継続ないし再活用は、このように説明されることになる。

むろん、経済・社会・文化の関係は、前者が後者を一方向的に規定する関係ではない。むしろ、相互に規定しあう動態的なものと考える必要がある。経済行為が文化的に規定されるとすれば、先のアプローチの出発点である生存の確保、目的合理的選択じたいが西洋近代経済人的な文化バイアスの産物なのではないかという反省も出てくる。先のアプローチを相対化し補完するアプローチとして、たとえば、生存の確保がタイ農村の人びとにとって何を意味するのかを問い、その理解を試行するアプローチが考えられる。このばあい生存は、狭義の生物有機体的生命の維持というよりも、社会的文化的な生の実現であろう。さらにいえば、この生は現世での生のみを意味するのではない。それは生前・死後の魂の世界などを含む生をめぐる観念全体のなかに位置付けられた生である。

たとえば、タイ農村の人びとの間では、次の霊魂観が根強くみられる。すなわち、死後の魂は身体が滅した後、異界の旅に出、天国で過ごし、やがて輪廻転生するとの観念である。生前に善行をなし、功徳を積んだ霊魂は、死後、速やかに旅を進めるが、諸精霊などのしわざや功徳の不足で、霊魂が地上から旅立てないでいる可能性も云々される。もはや功徳を転送（回向）する必要がここに生じる。善行による功徳積みによる輪廻転生という図式は、農村社会の道徳観念、霊魂など超経験的な存在をめぐる観念、超世俗的な宗教的価値観の三者相互が密接に結びつく図式である。

このようにタイ仏教は内道徳と結びつくが、さらに内道徳は経済実践と次のように結びつく。つまり、気まぐれな天候や市場経済との（無道徳的）駆け引きにより財をなす行為は、報恩など道徳実践、布施など宗教実践につながってこそ充分な評価を得る行為となる。このように経済行為、社会慣行、道徳規範は、宗教的価値観によって意味付けられ相対化される。しかし同時に他方、宗教実践や道徳実践は経済的成功がなければ充分に行なえない面をもつことになる。この側面は経済的成功イコール道徳性、宗教性の顕現という短絡的人物評価を生じさせもする。この経済、道徳、宗教の相互関係を、かりにタイ的連関と呼ぶとすれば、前章で述べた農村的（身内的）社会文化慣行は、このタイ的連関の一部をなすものということになる。

繰り返し述べるように、経済生活の転換に際して、タイ農村の人びとのあいだには文化的葛藤の跡があまりみられなかったし、市場経済の積極的受容の態度が印象的であった。本稿ではこうした態度の背景に、一方で物的豊かさ、

上昇的社会移動への計算と判断をみたわけであるが、他方で加えて、右のタイ的連関が人びとをして、このような姿勢をとらしめたと考える。資本主義的市場経済の受容は、タイ的連関の実践としてなされ、経済生活の転換はこうした連関を新たに展開させる契機となる。

タイ農村の人びとのあり方に、経済合理的選択をみる立場とタイ的な連関をみる立場は、両立しないわけではない。タイの人びとはタイ的な連関のなかに経済合理的選択を組み込んできたといえる。しかし、資本主義的市場経済に対応した経済合理的選択を積み重ねていく過程は、タイ的連関の形が変容への圧力にさらされる過程でもある。それは経済中心的な西洋近代の文化とタイ的文化の接触による変容過程と言っても良いかもしれない。変容のいくつかの局面を最後に挙げておく。

たとえば、市場経済への包摂が進むと、もともと拝金主義と一定の親和性を持つタイ農村仏教は、物的肥大志向、世俗化に拍車がかかる。そして、この傾向は経済・道徳・宗教それぞれが自律的次元でありながら、連関している構造じたいを危うくする。構造上の均衡の崩れの反動として、禁欲、超世俗を強調する精神主義的傾向が現れもする。[7] こうした動態のなかで今後、従来のタイ的連関が変容する可能性もある。

また、この文化接触のなかで、人びと自身が自らの社会慣行・儀礼慣行をみる目も変化してゆく。たとえば、調査村における精霊憑依を伴う守護霊儀礼ピーメン踊りは、以前は淡々と行なわれていた。しかし、近年はしだいに派手に演じられるようになってきた。参加者は何度も「これが我々の慣行だ」と叫びながら、音楽を演奏したり踊ったりするようになった。彼らは外部者にたいしてこう叫び、自らの祭りを誇示しているようにもみえ、自らにそのように言い聞かせているようにもみえた。つまり、彼らのなかには儀礼を対象化する外部者の目があり、彼ら自身が異文化を見るように自らが演じている儀礼を対象化しながら、しかし、その異文化が自身の本来の文化であることを確認するために叫んでいるように思われた。社会変化のなかでアイデンティティ確保の問題は以前より切実になった。伝統的形式で行なわれる出家式・結婚式・葬式といった通過儀礼を伴う行事の根強さも、人びとのアイデンティティ再編の必要と関連しているのかもしれない。今後、儀礼慣行はそこに「伝統文化」をみたい人びとによって操作され、担われていくのかもしれない。

また、従来のタイ的連関に今後大きな影響を与えそうなのが、少子化である。チェンマイの調査村では、三〇—四〇歳代の夫婦のほとんどは子供を一人しかもうけていない。現金支出増に比べて収入が伸び悩むなか、子供にはできるだけ教育を付けさせたいと思う親たちの選択の結果である。

親世代はキョウダイが多く、近接居住世帯群を構成しているため、一人っ子のイトコ同士の関係は幼馴染の近所同士で緊密である。しかし、現在、小中学生である彼らが、上級学校に進学し、さまざまな形で農外就労し始めた時、身内のネットワークは従来より人数的に細り、空間的にもより拡散し、現在の機能を保てなくなる可能性がある。そうなれば、身内内の道徳規範は堅持されにくくなる。身内的ネットワークの弱体化のなかで、親世代の高齢化が進むことになろうが、こうした状況打開に向けてタイの人びとが採る選択のなかに、新たなタイ的連関の形が現れるかもしれない。

おわりに

本稿では、資本主義的市場経済の浸透下のタイ農村の人びとの在り方について、急激に変化した経済生活の側面と根強く変化しない社会文化の側面の相互連関に注目し、考察した。現代タイ農村というフィールドは、小農民的性格をもっていた地域社会に、急激に資本主義的市場経済が浸透した多くの事例のひとつであり、人びとが経済生活スタイルの転換を急激になした事例のひとつであった。この急転換は円滑になされたが、社会文化のありようはそのわりには変化しなかった。社会文化の根本的変化を伴わずに、経済生活の変換がなされた。この点を一方で小農民社会じたいの基本性格から考察し、他方で、タイ的な経済・道徳・宗教の独特な連関の在り方として説明した。現代タイ農村の人びとのありようは、資本主義的市場経済を受容しつつ、従来の社会文化と両立させる点で、柔軟ともいえ、頑固ともいえた[8]。それは資本主義的市場経済にたいして、タイ的な連関構造がみせる柔軟で頑固な性格であった。しかし、こうした連関は根強いとはいえ、不変ではないとも考えた。

日本とタイは、ともに資本主義的市場経済を急速に受容し、そこに深刻な文化的葛藤が一般的、表面的にみられない点でも共通性があると思われる。ただし、両国の地域社会の比較は簡単ではない。両者が置かれた政治経済的条件を比較検討する作業と社会文化の比較検討作業の両方が不可欠だからである。

タイのばあい、印象的で興味深いのは、先の連関のなかで、依然、宗教がひとつの位置を占めていることである。人びとは経済至上主義的な生活に浸かりつつ、他方でそれを別の価値観で相対化しえる機会を、儀礼慣行の遵行という形で留保している。たとえば、出家は、男性にとって、依然重要な通過儀礼的意味をもっている行為であるし、年配者にはこうした慣行を担う者としての役割が用意されている。農村仏教あるいはアニミズム的世界観は、拝金主義

的な世俗的価値観と親和的であるが、世俗的価値観に還元しきれない部分ももっている。資本主義的市場経済による地域社会の包摂が徹底するなかで、このような宗教を構成要素として含むタイ的連関がどのような変容をみせるのか、引き続き見守りたいと思う。

註

（1）当地は行政的には、チェンマイ県ハーンドン郡ノーントーン行政村の一行政区であり、チェンマイ市から南南西方向に、自動車で約二九キロ走った地点に位置する。一九八〇年代中頃の調査は、文部省アジア諸国等派遣留学生奨学金を得てのタイ国滞在中に行なったものである。また、最新の見聞は、大谷大学真宗総合研究所一般研究「社会変動のなかの儀礼慣行」の一部として二〇〇〇年夏に行なった調査の際、得たものである。

（2）以下の記述に関わるデータについては、高井［一九九八］参照。

（3）同じチェンマイ盆地内でも、市街により近く、通勤労働者化・兼業化が早く進み、かつ農業条件がラムヤイに適した所では、果樹園化もより早期に進行していた。ラムヤイ農業および果樹園化と兼業化の関係については、関［一九九五］が詳しい。

（4）ウルフ著『農民』参照。

（5）儀礼行事と村内の互酬的関係については、平井［一九九七］の記述、分析が参考になる。

（6）ジンマーマンは一九三〇年頃のタイ農民が安易に負債を重ねることに憂慮しているが、現在のタイ農村住民の負債への態度はジンマーマンの記述を想起させる［Zimmerman 1931: 195—215］。

（7）林［一九九〇］が述べるように、タイ仏教については、一方で多額の金銭布施、儀礼の華美化など物質的肥大傾向が指摘できると同時に、森の寺の増加、原理主義的な新派の形成など精神主義的な傾向も顕著になってきている。

（8）ルースであるがゆえに、ある種の構造が根強く保たれる在り方を、エンブリー［一九五〇］以来、多くのタイ研究者がタイの社会構造あるいは文化の特質とみてきた。本稿では、筆者の調査地での経験を、エンブリー以来のテーマに引き寄せつつ、一方でタイ文化理解の脈絡から、他方で経済社会変動の脈絡から再整理してみようとした。

引用・参考文献

赤木攻（一九八九）『タイの政治文化—剛と柔—』勁草書房。

石井米雄（一九九一）『タイ仏教入門』めこん。

北原淳（一九九〇）『タイ農村社会論』勁草書房。

関泰子（一九九五）「進行する兼業化とラムヤイ農業—変容する北部タイ農村社会—」アジア政経学会『アジア研究』四一（二）、六五—一〇六頁。

高井康弘（一九八八）「北タイ農村における親子共同の形態と性格」神戸大学社会学研究会『社会学雑誌』一四、一五三—一八八頁。

高井康弘（一九九一）「北タイの守護霊観念と農民家族—ピー・プ

ーヤー儀礼の事例研究―」アジア政経学会『アジア研究』三七（二）、三三―六九頁。
高井康弘（一九九八）「農業経営の問題と農外就労の様相―一九八〇年代中頃の北タイ農業村―」『大谷大学研究年報』五〇、一―五一頁。
高井康弘（二〇〇〇）「儀礼実践の動態」赤木攻、北原淳、竹内隆夫編『続タイ農村の構造と変動―十五年の軌跡―』勁草書房、一三三―一七八頁。
林行夫（一九九〇）「村落宗教の構造と変容」口羽益生編『ドンデーン村の伝統構造とその変容』創文社、四〇三―五〇六頁。
平井京之介（一九九七）「北タイ農村における「仕事」概念の一考察―相互行為と社会関係―」『国立民族学博物館研究報告』二二（三）、五二七―五八四頁。
山下晋司（一九八八）『儀礼の政治学―インドネシア・トラジャの動態的民族誌―』弘文堂。
Embree, John (1950) "Thailand: A Loosely Structured Social System," *American Anthropologist* 52.
Mulder, Niels (1979) *Everyday Life in Thailand: An Interpretation*, Duang Kamol, Bangkok.
Redfield, Robert (1956) *Peasant Society and Culture*, The University of Chicago Press, Chicago & London.
Wolf, Eric R. (1966) *Peasants*, New Jersey. 佐藤信行・黒田悦子訳『農民』鹿島出版会、一九七二。
Zimmerman, Carle C. (1931) *Siam: Rural Economic Survey, 1930-31*, Bangkok.